

花水木

Mariko Nakata

中田 マリコ (72期)



筆者近影

有難いことに最近、お洒落だねとか、自分のスタイルを持っているね、と言っていただけが増えました。

ファッションに限らず、自分らしさとは手に入れるのが難しいもの。何かと鬱屈とした時代だからこそ、自分らしく生きてほしい。本稿では、自分探しに悩む全ての人に、あなたは一人じゃないと伝えたくて、私の自分探しの原点についてお話しします。



中高でテニスや陸上競技をやってきた私は、大学からストリートダンスを始めます。当時は華やかなジャンルのJAZZに憧れていたものの、Egoistic Dancers^{*1}で私が選んだのはHOUSEというジャンルでした。

音楽としてのHOUSEの発祥の地はアメリカ、シカゴのWarehouseというクラブです。HOUSEダンスは、このHOUSEミュージックに合わせ、いくつものステップでナチュラルに踊るジャンルです。性質上見せ場を作ることが難しく、コンテストでは不利とされています。その代わり、ダンサー同士がステップでコミュニケーションできるので、クラブカルチャーに向いています。

HOUSEのステップは緩く見えてテクニカルで、重心の微妙な違いで見え方が変わります。先輩には「地面をつかむイメージで。ステップの質感が変わる」などと教えてもらいました。

ダンスと向き合う4年間は辛い時間でした。基礎練のアイソレーション^{*2}。ステップの質感磨き。自分の動画のダサさにショックを受けつつ行うシルエット研究。上手な人の観察。レッスンやイベントに通う日々。

サークルの人間関係も厳しいものでした。当時、女子は「可愛い、飲み会でキャラが立つか、ダンスが上手」のいずれかでなければ居場所がないと言われていたようです。私はどれにも当てはまりませんでした。ダンスは初心者。飲み会は嫌いで、練習後は大阪の自宅に直帰する日々。真面目過ぎて社交性のない人だと思われていたでしょう。

そして、私は可愛くなれなかった。勉強とダンスの両立、大阪—京都間の通学のストレスで過食気味だった。多くの日本人に似合う服やメイクは私には似合わなかった。価値観の違う母には相談できなかった。そもそも私は「可愛い」が似合う人種ではなかった。

それでも私はダンスを続けました。誰にも打ち明けられない悩みと、数々の挫折に押し潰されそうになりながら。しかし、在学中に自分のダンスは見つかりませんでした。メンバーとも仲良くなれず、4回生、大学最後の学祭のチームから、私は外されました。

大学を卒業した私は、東京の法科大学院に進学することを決めます。表向きの理由は、異なる学派の法律を学びたいから。もう一つの理由は、京都にはもう私の居場所はないと思ったから。私は、EgoのM1・M2としてダンスを続ける夢を、諦めたのでした。



そんな私が自分らしさの片鱗を掴んだのは比較的最近のこと。それに伴い私のファッションは変化し、一度は失ったダンスへの情熱を徐々に取り戻していきます。とはいえ、私の自分探しはまだ道半ば。いつかこの続きを語る日が来るまで、一緒に頑張りましょう。



*1 京大のインカレダンスサークル。1回生～M1・M2回生(院生)まで所属する。通称「Ego」。

*2 体の他の部分は全て止めて、ある一部分だけを動かす練習。